

日本の中国語口語¹教育²に関する一考察

—北京師範大学での調査に基づいて³

温 琳

キーワード

中国語 口語教育 現状 問題提起

0. 内容提要

筆者在日本の大学从事汉语教育工作，一直为日本学生的“不开口”或者“能不开口就不开口”现象所困扰。经偶然机会，发现在中国国内学习汉语留学生的口语水平要远远高于在日本学习的日本学生。针对这一现象，可能有人觉得是理所当然的，而选择望洋兴叹。然而作为一名一线汉语教师，则不应选择放弃，而应“明知山有虎，偏向虎山行”，去挑战这座对外汉语教学的“险峰”。

不得不承认，立即采取相关措施，在相同时间内培养出同等水平学生的想法是不切实际的。那么如果是采取相关措施，使教学效果尽可能地接近中国大学的想法又是否可行呢？带着这个问题，笔者于2010年9月在中国对外汉语教学基地之一的北京师范大学进行了为期一周的实地调查。本文将在介绍调查结果，总结问题点的同时，重新审视日本的汉语口语教育。

目次

1. はじめに
2. 北京師範大学での調査
3. 日本の大学における中国語口語教育の現状
4. おわりに

1. はじめに

日本で日本人学生を対象とした中国語教育に携わっていると、学生が

積極的に話そうとしないことに日々悩まされる。とりわけ中国に行き、現地で中国語を学習している留学生と話すとその差に驚かされる。と同時に、中国で中国語を学習する留学生に対してどのように口語教育が行われているのか、日本で同じ教育効果を出すにはどうすれば良いのかを考えさせられる。

現在、中国には留学生に中国語を教える大学が数多く存在する。その中心となっているのが8つの対外漢語教学基地（本稿では以後、対外中国語教育センターと称する）である⁴。今回、中国の対外中国語教育センターにおける口語教育の実態を知るため、対外中国語教育センターの1つである北京師範大学漢語文化学院で調査を行った。本稿で紹介する対外中国語教育法が、日本における中国語の口語教育発展の一助となれば幸いである。

2. 北京師範大学での調査

北京師範大学で1年生～3年生⁵の会話の授業を見学し、中国での口語教育の現場をリサーチした。

表1は一年生の会話の授業の概要である。

表1をもう少し具体的に説明する。まず会話（101）を履修しているのは最低3ヶ月の中国語学習歴を持つ学生で、履修するには北京師範大学独自の中国語学力テストを受けなければならない。1クラスの人数は18人で、少人数制が守られている。学生の国籍は異なっており、アジア出身の学生もいれば、欧米出身の学生もいる。

教員は中国語のみで授業を行う。なぜなら、上記のように学生の出身地がさまざまであるため、教員が英語で授業を行うことが事実上制限され、授業中100%中国語を使用することにつながったと考えられる。だが、1年生の前期で、学生の中国語レベルがまだ低いことから、授業中教員が意識的に話すスピードを遅くし、なるべく簡単な語彙で授業を進める傾向が見られた。

授業形式については、授業の説明、関連写真の紹介といった様々な場面で、パワーポイントが多用されていることが特徴的である。これによ

表 1

授業名	会話 (101 ⁶)
授業時間	90 分
対象者学習歴	三か月以上
クラス分け基準	学力テスト
学生数	18
学生国籍 (人数順)	タイ, 日本, 韓国, インドネシア, アメリカ, ドイツ, パキスタン
教員使用言語	中国語
教員の話す スピード	遅い
教員の使用語彙 (難易度)	簡単 (難しい語彙を回避する傾向が見られる)
授業形式	PPT を多用。 同義語の違いをはっきりさせる。 新出単語の動詞を動賓構造で説明する。 品詞を問わず, 新出単語を用いた用例を 3 つ以上あげる。
テキスト	漢語会話課本 (一年・上) ⁷ , 王丕承

り, 教員が板書する時間が節約でき, 90 分の授業時間がより有効に使用できるメリットがあると考えられる。無論, 教員が目の前で板書することにより, 学生が書き順を確認しながら中国語の漢字を学ぶという簡体字を習得する上でのメリットが失われる可能性もある。また, 突発的な話題には対応しきれないというデメリットがあることも否定できない。

また, 新出単語の学習では, 単語の品詞を問わず用例を 3 つ列挙する。名詞の場合, 助数詞を含んだ例を挙げ, 動詞の場合, 目的語を伴った例を挙げる。この方法によって, 単語のみならず, 単語を用いたフレーズも同時に習得することができ, 習った単語をすぐに使えるようになる。さらに言えば, 学生に中国語の単語を習ったら, この単語はどのような助数詞或いはどのような動詞と一緒に用いるのかを考える習慣を身につけさせることができる。学生が自らその答えを探し, 見つけることでさらなる勉強になる。

次に2年生の会話の授業の概要を見てみよう。表2である。

表2を具体的に見てみよう。会話(201)は2年生前期の会話授業であるが、履修者の学習歴は必ずしも1年間ではなく、1年未満の者も1年以上の者もある。履修できるかどうかはやはり北京師範大学独自の中国語学力テストの得点で決まる。1クラスの人数は14人で、少人数制が徹底されている。学生の国籍にはばらつきが見られるが、アジア出身の学生が多い。

授業中教員の使用言語は、中国語のみである。1年生の授業とは異なり、教員が最初から意識的に話すスピードを緩めることはない。ただ話す内容や受講する学生の表情によって、話すスピードを調節する現象が見られた。授業中使用する語彙にも同様の現象が起きている。なるべく簡単な語彙で授業を進めるのではなく、使用する語彙を取捨する傾向が見ら

表2

授業名	会話(201 ⁸)
授業時間	90分
対象者学習歴	十か月以上
クラス分け基準	学力テスト
学生数	14
学生国籍 (人数順)	日本, 韓国, タイ, インドネシア, オーストラリア
教員使用言語	中国語
教員の話す スピード	通常のネイティブスピーカーのスピードだが、学生の様子によって調整を行う。
教員の使用語彙 (難易度)	やや簡単 (言葉を選ぶ傾向がみられる)
授業形式	PPTを多用。 新出単語の説明において、学生に説明してもらった後に、教員が補足説明する。 本文を学習する前、本文に関する質問を学生に提示、学生はそれらの質問を考えながら本文の学習に臨む。
テキスト	漢語会話課本(二年・上), 趙清永

れた。具体的には、授業内容や学生の学力を考慮したうえで、簡単だが基礎的な語彙を用いるか、それともやや難しいがタイミング的に提示しても良い語彙を用いるかを選択するということである。

授業形式については、1年生の授業と同様、パワーポイントが多用されている。だが、1年生と大きく異なる点も見られた。もっとも顕著なのは、単語の説明である。2年生の場合、教員が細かく説明することがなくなる。そして、学生が事前に予習し、授業中その成果を発表するという方法で、新出単語を学習する。教員は必要な時に補足する役割を果たす。テキストの本文を学習する際には、教員が先にいくつかの質問を提示し、学生にそれらの質問を考えさせながら本文の学習に臨ませる手法が用いられている。この方法により、学生はより集中して授業に臨むことができ、授業の効率アップにもつながると考えられる。

さらに3年生の会話の授業概要を見てみよう。表3である。

表3を用いて3年生前期の会話授業を見てみよう。履修者はみな2年以上の学習歴を持っている。履修できるかどうかは、1年生および2年生の当該授業と同様に北京師範大学独自の中国語学力テストの得点によって決まる。1クラス的人数は10人であり、少人数制が徹底されている。学生の国籍にはばらつきが見られるが、やはりアジア出身の学生と欧米出身の学生によってクラスが構成されている。

教員は授業中、中国語のみを使用する。会話(101)、会話(201)と異なるのは、教員が話すスピードを調節しなくなるということである。授業中使用する語彙も意識的に選別しなくなる。ネイティブスピーカーである中国人が同じシチュエーションで使用する語彙を使用する。

授業形式についてだが、新出単語の説明は2年生の授業と同様、学生が主役となって行う。教員は必要な時に補足するだけである。3年生の授業で、1年生、2年生と大きく異なる点は授業中スピーキングの練習を導入していることである。毎回30分前後、つまり授業時間の三分の一を話す練習にあてる。話題は教員か学生のどちらかが用意するのではなく、毎回教員と学生の両方が話題を2、3個用意し、どれについて話すかはみんな決めて決める。話す際は1人が話し、他の学生が聴くのではなく、教室

表 3

授業名	会話 (301 ⁹)
授業時間	90 分
対象者学習歴	二年以上
クラス分け基準	学力テスト
学生数	10
学生国籍 (人数順)	韓国, アメリカ, インドネシア, 日本
教員使用言語	中国語
教員の話す スピード	通常のネイティブスピーカーのスピード
教員の使用語彙 (難易度)	難しい言葉を回避せず使用する傾向がある
授業形式	新出単語の説明において、学生に説明してもらった後に、 教員が補足説明する。 授業の大半はテキストに沿って行う。読ませたり、話させ たりして、学生に休む暇を与えない。 教員が用意すると学生が用意することによって話題を集め、 授業時間中の 30 分前後を使用し、話すトレーニングを行 う。
テキスト	漢語会話課本, 買放

にいる全員が決められた話題について自分の意見を述べ、他人の意見も聞き、意見交換をする。聞き取れなかった際は、互いに質問もする。このスピーキングの時間中、筆者は教室の中が熱気に包まれているのを感じた。

ここでこれまで見てきた中国北京師範大学で行われている会話の授業についてまとめてみよう。1クラスの履修者数は、1年生：18名、2年生：14名、3年生：10名となっており、少人数制が徹底されていることが分かる。また、クラスのレベルが高くなるにつれ、履修者を減少させる傾向にあることも分かる。これによって、シラバス通りに授業を進めつつ、学生が口語を練習する時間を十分に確保できる。授業中の使用言語は中国語だけである。これは履修者の出身国や教員が英語や日本語、韓国語

を話せたとしても変わらない。授業内で学生のレベルに応じて教員が話すスピードを調節する現象が見られたが、1年生に対してはやや遅く、2年生に対しては状況に応じて加減し、3年生に対しては全く調節しないという基本方針が確立されている。授業形式については、1年生の時は教員が主役だが、2年生になると教員、生徒が共に主役となり、3年生になると生徒が主役となるという構図が見られる。授業を教員の1人芝居型から学生の全員参加型に移行していく形式だとも言える。

3. 日本の大学における中国語口語教育の現状

(1) 日本の大学における中国語口語教育の現状

ここで日本の大学における中国語の口語教育の現状について確認しておこう。

その前に、中国語の口語教育の変遷について見てみたい。李曉琪(2006)によれば、中国における中国語の口語教育は3つの段階に分けることができる。具体的には以下の通りである。

第一段階は中国語教育が始められた20世紀60年代～90年代半ばまでで、口語という独立した科目はなく、読む、書くといった科目の中に練りこんだ教育方法がとられていた。つまり、口語教育が余り重要視されていなかった段階と言っても良いだろう。

第二段階は20世紀90年代後半～2002年までで、口語が独立した科目である必要性が認められ始め、口語教育のための教授法の研究や教材の開発も行われるようになった。

第三段階は2003年～現在までで、口語が独立した科目として確立され、教授法の開発もより盛んになり、有効な教授法や教材も現れるようになった。それらの教授法や教材を用いた教育の成果も中国の各対外中国語教育センターから報告されている。

上記のことをふまえて、日本における中国語の口語教育を考えてみたい。日本における中国語口語教育はまだ上記の第三段階に入り切れていない状態で、第二段階と第三段階の間にあると言える。中国語学科を有する四年制大学は会話の授業を設け、話す力をトレーニングすることに

力を注いでいる。このことから、口語は独立した科目として重要視されていると考えられる。しかし、中国語の口語教育に関する研究、教授法や教材開発はまだ不十分である。

(2) 日本の大学における中国語口語教育の問題点

ここで日本の大学における中国語の口語教育の問題点を教材、教授法、教育者及び社会環境といった四つの側面から考えてみたい。

まずは教材の面から見てみたい。現在日本で出版されている中国語のテキストは第二外国語としての中国語教育向けのものが圧倒的多数であり、専門科目としての中国語教育に役立つものは少ない。また、文法書や会話形式の教科書が大量に出版されている一方、語感を培える、読解を中心とした教科書は非常に少ない。その結果、ほとんどの大学において、会話の授業では中国で出版された教科書が使用されている。現時点では日本に適切な教科書がないから、中国から持ってくるというやり方が悪いと思わない。むしろ人材育成のためには良いことだとも思う。しかし、筆者はこういった教科書は日本の国民生活、風俗文化にあまり対応していないと考える。たとえば、中国の文化、中国の地方紹介といった内容は当然学ぶべきかもしれないが、日本の風習、文化、地方紹介といった内容もあって良いのではないだろうか。この問題を解決するためには日本人学生に合った教材を開発しなければならない。

次に教授法の面から見てみたい。胡玉華（2009）によると、日本における中国語教育に用いられる教授法は主に「文法訳読教授法」、「直接教授法」、「オーデオリンガル教授法」の三つである。

文法訳読教授法は中国語教育に最も貢献した、重要な教授法ということが出来る。しかしこの教授法を用いた授業では、書き言葉が中心になり、語彙力の増強や複雑な文章の解読が強調される反面、音声面や話し言葉が軽視されがちである。その結果、大部分の学習者は長年の学習にも関わらず日常的な言語使用さえできない（米山ほか、1983）。

直接教授法は媒介語を使用しない、口頭での言語の訓練という技術が中心となる。そのため、学習者が目標言語に慣れるのが早く、とくにヒ

アリス・スピーキング能力の育成に向いている。しかし、この教授法にも限界がある。例えば、媒介語を使用しないため、学習内容が制限されることや意味説明や用例提示に時間が費やされ、学習者の発語時間が減ることが挙げられる（小柳，2004）。

オーディオリンガル教授法は構文中心の会話の暗記や音声の反復ドリルなどによって「聴く」及び「話す」能力の育成を目指す教授法である。50年代に、「もっとも科学的な教授法」として世界中のあらゆる外国語教育に採用されるようになった。しかし、オーディオリンガル教授法が重要視している「模倣暗記練習」や「パターン練習」のような機械的な口頭練習では、学習者が受動的になり、自発的に中国語の文を作成したり、場面に相応しい発話をしたりする、真のコミュニケーション能力は身につけることができない。

上記が記している通り、いままで用いられてきた教授法にはそれぞれ限界があり、口語教育法としては不十分だと言わざるを得ない。現状としては、日本において口語教育専用の教授法は未だに確立されておらず、中・上級口語教育でも初級口語教育と同様の方法が用いられる傾向が強い。具体的に言うと、初級口語教育で用いられている方法は繰り返し音読したり、テキストを丸暗記したりするというインプットに重点を置いたものである。だが、この方法は中・上級口語教育で学生に中国語を話させるという目標を達成するためには不十分である。これによって、初級口語教育から中・上級口語教育にうまくレベルアップできないという問題が生じている。このことが日本の大学における中国語口語教育の一番大きな難点だと筆者は考える。

李曉琪（2006）¹⁰が口語のレベルを細かく設定している。次の表4である。

李曉琪（2006）によると、レベル1, 2, 3が初級、レベル2, 3, 4が中級レベル3, 4, 5が上級にあたる。

表4を参考にしながら、日本人学生の口語レベルを考えてみたい。筆者の周りにいる日本人学生¹¹を観察していると、中国語での挨拶や簡単な日常会話は問題ないが、それ以上会話を続けられない者が多い。挨拶や

表4

基準 レベル	言語体系能力		表現及び適切に表現能力		文化適応能力
	言語品質	言語タイプ	場面	語用行為	文化背景知識
1	話す声、リズム、声調が比較的に正しい。単文を話すスピードは少々遅い。	単文。	決まった表現を用いて必要不可欠な場面を乗り切る。	受動的に受け答えできるだけ。	基本的な挨拶が分かる。
2	話す声、リズム、声調が正しい。変調、軽声、r化に注意を払うことができる。話すスピードは普通に近い。	単文だが、文と文の間に簡単な前後関係がある。	生活のあらゆる場面において必要な表現ができる。	簡単な質問ができる。	中国人の一般的なライフスタイルや文化、伝統が分かる。
3	声調、イントネーションが正しくかつ自然である。1分間150-180字が話せる。	比較的に繋がりのある短い段落の文章。	中国人の暮らしに近づき、中国人と具体的な話題に対して話せる。	face to faceの会話が続けられる。解釈、説明、補足等のテクニックが使用できる。	あらゆる文化風習及び特定場面においての言語習慣がわかる。
4	ポーズ、ストレス（重音）が比較的に上手く使いこなせる。表現が豊富である。	文章或いは話しのサイクルに強い論理性があり、接続が自然である。	普通の話題について自由自在に話すことができ、突発的な事に対応できる。	モノローグを比較的長く継続できる。自ら話し出す或いは途中から話しに参加する、話題を変えることができる。	文化的現象の背後にある価値観が分かる。
5	アクセント、イントネーションが自然、かつ音の変化を利用して異なる意味を表す技を持つ。	話しの主旨がはっきりしていて、話す順番が合理的である。	話題が豊富であり、あらゆる複雑な場面に対応できる。	言語テクニックが自由自在に使え、会話を全体的にコントロールできる。ボディランゲージ等の言語手段も使いこなせる。	文化的現象の中にある考え方、倫理道徳及び民族心理が完全に理解できる。

簡単な日常会話が終われば黙ってしまうのがほとんどである。また、ある一つのテーマについて自分の意見を述べるという場面では、大抵の学生は簡単な文を2, 3個, 多くても5, 6個しか話すことができない。それも必ずしも文法が合っている訳ではない。それ以上話せるのは留学帰りかハーフネイティブである。

教育の観点から見ると、挨拶や簡単な文ができるということは口語の基礎が身についていると考えられる。表4にあるレベル1は完全にクリアし、人によってはレベル2もクリアしていると言えよう。しかし、レベル1をクリアした者にせよ、レベル1とレベル2をクリアした者にせよ、それ以上は話せないことから、レベル3までは到達していないことが分かる。レベルを初級, 中級, 上級で考えると、中級に上がっていないこととなる。つまり、日本の大学における口語教育は3年間¹²を費やしてもなお初級段階に留まっていることになる。

単文は作れても、長い文章が作れないということは一つのテーマについて長く話す或いは書くといった訓練を受けてこなかったと推察できる。この現状が変わらない限り、日本人学生の話す力は向上しないのではないだろうか。日本の大学における中国語の口語教育を改善するには、到達目標をはっきりとさせ、限られた学習時間を各目標に上手に分配し、使用しなければならない。

次に教育者という面から見てみたい。筆者の観察では、日本の教員は大学生を大人として扱いきる傾向がある。18, 9歳なのだから、授業時間以外の勉強は学生自身に任せるという考え方は、外国語以外の分野で通用するかもしれないが、外国語教育にも通用するのだろうか。ネイティブスピーカーが母国語を習得するプロセスを思い起こしてもらいたい。周囲の親や祖父母が手取り足取り教えたことがあるはずである。しかるに大学に入り、中国語をゼロから学び始める学生に対して、授業時間以外は自分でやれというのは理にかなっていないのではないだろうか。例え実年齢が18歳, 19歳であっても、中国語に関しては赤ちゃんと同じである。教育に携わっている教員がそれをしっかりと認識したうえで教育しなければ、決して良い人材を育てることはできない。

最後に中国語教育を取り巻く社会環境について考えてみよう。日本人の大学生からは必死さややる気が感じられないといったコメントを耳にすることがある。考えてみれば確かに日本の大学で中国語をマスターしようと一生懸命努力する学生は一学年に1人いるかどうかである。その理由は就職にあると考えられる。なぜなら、たとえ大学4年間で中国語をマスターできていなくても、単位さえ取っておけば、あとは就職活動を一生懸命すれば就職することができるからだ。つまり自分の専門である中国語を手段として使わなくても就職はできるということが現実的に起きているということだ。さらに言えば、中国語が特技だからと採用された人と中国語と関係なく採用された人との初任給はほぼ同額である。このような社会環境の下で、日本人大学生が中国語に限らず、何かを必死になってマスターしようと思わないのも理解できないことではない。

4. おわりに

本稿は日本人の大学生が中国語を専門科目として四年間勉強してもあまり話すことができないという問題について、中国の対外中国語教育センターである北京師範大学での教育方法を紹介しつつ、その要因を探った。筆者が考えるに要因は単一ではなく、3で述べた通り、教材、教授法、教育者及び社会環境の多岐にわたる。日本における中国語の口語教育を向上させるには、これらの要因から目をそむけず立ち向かっていく必要がある。

付録 1. 李曉琪 (2006) 口語レベル分け表

标准 层次	语言系统能力		表达及得体表达能力		文化适应能力
	语言品质	篇章类型	场景	语用行为	文化北京知识
1	较标准的声, 韵, 调。单句语速较慢。	单句	用固定表达应付生活急需	只能被动地答话	了解基本礼貌用语
2	声韵调标准并注意变调, 轻声, 儿化。语速接近正常	成句表达且句与句之间有简单的连贯	表达能满足基本生活需要	能简单发问	了解中国人基本的生活方式和文化传统
3	句音, 句调标准, 自然。语速 150-180 字/分	比较连贯的短小的语段或话轮	接近中国人的生活圈, 谈论具体话题	能维持面对面的交谈, 运用解释, 说明, 补充等策略	了解各种文化风俗习惯及其特定场合中的语言表达习惯
4	停顿, 轻重音运用较好。语义表达形式丰富	语段或话轮间逻辑性强, 起承转合自然	自如地谈论一般话题, 能应对意外困难的情景	较长时间的独白, 主动谈话, 插话或改变话题	了解文化现象背后的各种价值观念
5	音调, 句调准确自如并善于运用声音技巧表达丰富的语义	语篇中心明确, 阐述清晰有序	话题范围广泛, 自如应对各种复杂情景	自如运用各种语用策略, 可控制整篇谈话, 并恰当运用体态语等副语言手段	全面了解文化现象中的各种思想观念, 伦理道德意识以及民族心理特征

付録2. 中国北京師範大学で使用されているテキストの見本

汉语会话课本（一年级上册）

4. 哪些	nǎxiē	(代)	which; who; what (used before a noun in plural number)
			你去过 ~ 地方 / ~ 交通方式 / 你们班有 ~ 老师
5. 既	jì	(连)	both...and...; as well as (often used together with such adverbs as “且”、“又”、“也” to show both situations are available)
			~ 聪明又能干 / 坐地铁 ~ 快且安全 / ~ 学汉语也学英语
6. 从不	cóngbù	(短语)	never
			~ 堵车 / ~ 迟到 / ~ 生气
7. 边…… 边……	biān… biān…	(短语)	(used before two verbs respectively to indicate simultaneous actions)
			~ 学习 ~ 打工 / ~ 走 ~ 唱 / ~ 听 ~ 翻译
8. 担心	dān//xīn	(动)	worry; feel anxious
			特别 ~ / ~ 也没有用 / 别 ~
9. 用不着	yòng · buzháo	(短语)	there's no need to; do not have to
			~ 为我担心 / ~ 生气 / ~ 说这么多
10. 餐厅	cāntīng	(名)	dining room; dining hall; restaurant
			一家 ~ / 留学生 ~ / ~ 关门了
11. 省	shěng	(动)	save; economize
			~ 地方 / 别 ~ 钱 / ~ 下了许多时间
12. 距离	jùlí	(名)	distance
			~ 很远 / 还有一段 ~ / ~ 近很方便
13. 人们	rén · men	(名)	people; public
			~ 都睡了 / ~ 不这样认为 / ~ 都会这样想
14. 打车	dǎ//chē	(离)	hail a taxi, take a taxi
			~ 有时候不方便 / ~ 比较贵 / 咱们还是 ~ 吧

参考文献

(中国語)

- 陈建民, 1984, 汉语口语, 北京出版社
- 崔希亮, 2010, 对外汉语综合课课堂教学研究, 北京语言大学出版社
- 崔希亮, 2010, 对外汉语综合课优秀教案集, 北京语言大学出版社
- 李柏令, 2010, 新思域下的汉语课堂—“以学生为中心”的对外汉语教学探索, 上海交通大学出版社
- 李晓琪, 2006, 对外汉语口语教学研究, 商务印书馆
- 刘珣, 2002, 对外汉语教育学引论, 北京语言大学出版社
- 陆剑明, 2005, 作为第二语言的汉语本体研究, 外语教学与研究出版社
- 钱玉莲, 赵晴菊, 2009, 留学生汉语输出学习策略研究, 世界图书出版公司
- 石锋, 施向东, 2009, 汉语教学谈, 南开大学出版社
- 王顺洪, 2008, 日本人汉语学习研究, 北京大学出版社
- 王尚文, 2006, 语感论, 上海教育出版社
- 王永德, 2004, 外国留学生习得汉语句子的比较研究, 安徽大学出版社
- 杨惠元, 1996, 汉语听力说话教学法, 北京大学出版社
- 章纪孝, 1993, 高级汉语口语—话题交际, 语言学院出版社

(日本語)

- 相原茂・田禾・周国強, 2008, 『タスク式えんぴつで覚える中国語』, 朝日出版社
- 市川伸一, 2000, 『勉強法が変わる本—心理学からのアドバイス』, 岩波書店
- 胡玉華, 2009, 『中国語教育とコミュニケーション能力の育成』, 東方書店
- 胡玉華・宇野忍, 2004, 「大学生の中国語の学習方法に関する実態調査」, 國學院大學紀要『國學院雜誌』105 卷第4号
- 輿水優, 2002, 「全国中国語教育協議会活動報告」, 『日本の中国語教育—その現状と課題・2002』, 好文出版
- 小柳かおる, 2004, 『日本語教師のための新しい言語習得概論』, スリーエーネットワーク
- 中野貞弘, 2002, 「高校中国語教育の現状と課題」, 『日本の中国語教育—その現状と課題・2002』, 好文出版

竹内理, 2003, 『より良い外国語学習法を求めて—外国語学習成功者の研究』, 松柏社
米山朝二・佐野正之, 1983, 『新しい英語科教育法』, 大修館書店

-
- 1 本稿において「口語」はスピーキング, 話すことを指す。書き言葉と区別する話し言葉のことではない。
 - 2 本稿における中国語教育は四年制大学の専門科目として行う中国語教育を指し, 第二外国語としての中国語教育ではない。
 - 3 この研究は麗澤大学の学術研究助成金により実施したものである。関係者各位に御礼を申し上げる。
 - 4 北京大学、北京語言文化大学、北京師範大学、復旦大学、南開大学、華東師範大学、南京師範大学、人民大学の8つである。
 - 5 北京師範大学において、4年生には会話の授業がないため、調査は1年生～3年生を対象に実施した。
 - 6 北京師範大学における授業コード。101は1年生前期を意味する。したがって、会話(101)は1年生前期の会話の授業を指す。
 - 7 付録2を参照されたい。
 - 8 北京師範大学における授業コードである。201は2年生前期を意味する。したがって、会話(201)は2年生前期の会話の授業を指す。
 - 9 北京師範大学における授業コードである。301は3年生前期を意味する。会話(301)は3年生前期の会話の授業を意味する。
 - 10 李曉琪(2006), p124, 筆者訳。中国語のものは付録1を参照されたい。
 - 11 筆者が1年入学時から～4年卒業時まで観察した日本人学生を指す。
 - 12 日本の大学は四年制であるが、就職活動などで実際勉強できるのは3年間だとされている。